

# 朝鮮 軍記研究の現状と課題

防衛大学校

井上泰至

# 研究の難しさと重要性

## 難しさ

- 1 文献の多さ ↔
- 2 内容の政治性 ↔
- 3 内容の雑種性 ↔

## 重要性

- 1 影響力の大きさ  
時間的にも地域的にも
- 2 国際性のあるテーマ  
東アジアの一大事件
- 3 学際性のあるテーマ  
文学・歴史・思想研究

→優秀で意欲的な研究者の登場を待っている

# 文献のひろがり

金時徳『異国征伐戦記の世界』（2010）

巻末文献一覧（朝鮮侵攻関係に限る）

日本 61      中国14      朝鮮 9      計84点

この他に、**武士の覚書**、**近代文献**が大量にある

例      北島万次『朝鮮日々記・高麗日記』（1982）

村井弦斎『朝鮮征伐（鎧の風）』（1894）

→井上2011

『日本戦史 朝鮮役 補伝』（参謀本部編、1923）

# 講義のアウトライン

サンプル 出版されたそれぞれの時期を代表するテキスト4点

堀正意『朝鮮征伐記』（1659）

馬場信意『朝鮮太平記』（1705）

武内確斎作・岡田玉山画『絵本太閤記』六・七編（1801～2）

鶴峯戊申作・歌川貞秀画『絵本朝鮮征伐記』（1853～4）

これまで分かってきていること

と

これから解明されるべきこと

を紹介

# 1－1 朝鮮征伐記（堀本） 分かっていること

- 1 作者堀正意＝林羅山の弟子、尾張藩に仕官  
(桑田忠親1965・阿部一彦1997、2009)
- 2 絵入り・仮名本→写真  
(井上泰至2014)
- 3 中国ダネ 『両朝平攘録』『武備志』の影響  
(徳富蘇峰1921・中村栄孝1975・金時徳2010)

# 1－2 朝鮮征伐記 これからの課題

## 1 写本をどのように板本化したか？

蓬左文庫本・御茶ノ水図書館成簀堂文庫本・彰考館本などとの比較

## 2 なぜ、この時期に成立したのか？

寛永譜との関係＝他の軍記・書上・覚書との比較

→梶原1999・鈴木2016

海禁体制・朝鮮通信使との関係＝板本の挿絵の検討

→井上2016B・高埜2017

中国文献との関係＝採用した/しなかった資料の意味

## 2-1 朝鮮太平記 分かっていること

### 1 軍書作家馬場信意の初作

数少ない作者名を掲げた作品 (井上2014)

### 2 歴史小説のような通俗史書

人物主体 娯楽化 読み物化 (井上2014)

### 3 和刻本『懲毖録』の影響

朝鮮関係の記事のふくらみ (金2010)

## 2-2 朝鮮太平記 これからの課題

1 出版の問題 同時期の『朝鮮軍記大全』との関係

2 朝鮮関係以外の依拠資料の発掘  
和軍記・漢軍記・中国資料

3 思想的位置 貝原益軒 和刻本『懲毖録』序  
武に貪欲な豊臣家・武を忘れた朝鮮  
山鹿素行など兵学との関連



## 3-1 絵本太閤記 分かっていること

- 1 絵本ものの始発（読本史における位置）  
(大高ほか2008)
- 2 実録の影響＝『太閤真蹟記』（濱田2010)
- 3 宣長学の影響 序者＝妙法院関係者  
益軒的戦争観の否定（井上2016A）

## 3－2 絵本太閤記 これからの課題

- 1 作者武内確斎の位置 頼山陽人脈  
信長・秀吉の評価の変化
- 2 絵の分析 朝鮮人と中国人の書き分け
- 3 演劇・絵画との関係 秀吉関係演劇の流行  
清正など英雄の画題化

# 4－1 絵本朝鮮征伐記

## 分かっていること

- 1 幕末読本の政治性・神話性（濱田1961・天野2013）  
国学・水戸学との関係
- 2 神話の画題化（井上2011）  
古代神話・海戦のイメージ

## 4－2 絵本朝鮮征伐記 これからの課題

- 1 作者鶴峯戊申の位置 水戸学・国学
- 2 画者歌川貞秀の画業の特徴  
地図・絵図の俯瞰性  
動的構図
- 3 「日本外史」の影響 幕末の戦争観との関係

# 参考文献

徳富蘇峰『近世日本国民史 朝鮮役』上巻(民友社、1921)

濱田啓介「幕末読本の一傾向」(「近世文藝」6、1961)

桑田忠親『太閤記の研究』(徳間書店、1965)

中村栄孝「蓬左文庫の『朝鮮征伐記』古写本について」

(『名古屋大学日本史論集』下巻、吉川弘文館、1975)

北島万次『朝鮮日々記・高麗日記』(1982)

阿部一彦『『太閤記』とその周辺』(和泉書院、1997)

梶原正昭『室町・戦国軍記の展望』(和泉書院、1999)

大高洋司ほか『読本事典』(笠間書院、2008)

阿部一彦『近世初期軍記の研究』(新典社、2009)

金時徳『異国征伐戦記の世界』(笠間書院、2010)

濱田啓介「『絵本太閤記』と『太閤真蹟記』」

(『近世文学・伝達と様式に関する私見』京都大学出版会、2010)

井上泰至・金時徳『秀吉の対外戦争』(笠間書院、2011)

天野聡一「神代を描いた読本」

(「アナホリッシュ国文学」3、2013年6月)

井上泰至『近世刊行軍書論』(笠間書院、2014)

鈴木彰「文芸としての「覚書」」(「文学」2015年4月)

井上泰至A「帝国史観と皇国史観の秀吉像—『絵本太閤記』の位置」

(前田雅之ほか『幕末明治 移行期の思想と文化』勉誠出版)

井上泰至B『近世日本の歴史叙述と対外意識』(勉誠出版、2016)

高埜利彦「十七世紀の文学研究への提言」

(「近世文学史研究」1、2017年1月)

二〇一八年二月二七日 (@北京外国語大学)

## 幕末絵本読本の思想的側面

### 一鶴峯戊申校・歌川貞秀画『絵本朝鮮征伐記』を中心に一

防衛大学校 井上 泰至

#### 問題意識

書物の流通と社会の変容は相互に影響しあう。特定の書物(カノン)によって語られる思想史に留まらない思想史が成り立ちうるとすれば、それは通俗的な書物の流通が、一般の人々の意識を変容させ、定着させる点にあるだろう。社会の変化に大きな影響を与えた、書物の流通の問題は、文学研究でも歴史学研究でも残された課題である。

発表者は、十七～十八世紀前半にかけて、一般の歴史意識に通俗軍書の影響があることを課題として発表してきた(『近世刊行軍書論』笠間書院、二〇一五)。そこで語られ、さらに派生した演劇等によって、より浸透したのは、源平交代の武家政権の神話性に基づいた徳川政権の神話化であった、というのが発表者の見方である(「いくさ」の時代のイメージ形成「文学」二〇一五年三・四月号)。

では、十九世紀はどうか。通俗歴史読み物としては、名所図会から派生した絵本読本が注目される。かつての近世小説史では、軍書の図会化という派生商品であるとの位置づけからか、重視されてこなかったこのジャンルが、大坂を起点にしたその刊行数から注目されつつある(『読本事典』笠間書院、二〇〇八年)が、このジャンルはその始発の時点で、宣長国学が影を落としている。

この発表では、主に娯楽として読まれる歴史読み物たる絵本読本の始発における思想の芽を確認すると共に、その「啓蒙」的政治性が一気に表面化する嘉永期の作品を取り上げ、その様態を確認することで、このジャンルの思想的側面を考える端緒としたい。

#### 1 絵本読本始発時における宣長学の影響

資料1 伊達千広(一八〇二～七七)、紀州藩士・本居大平門・陸奥宗光父、『随々草』上  
おのれ幼きころは学問を好まずして、七歳の年より師につきて読書を習ひしかど、十ばかりまで四書を四たびまでくり返し読みたれど、ただ同じさまに忘れがちにて、はかばかしく読みつづくる事も無かりける。さるからに軍物語など好みて、七つの年はじめて絵本太閤記を読みしより、盛衰記・太平記などはいふも更なり、漢楚軍談・三国志などのから物語、その余り、書肆の持ちくる小説草紙大かたの書どもも見ざるはなく・・・

資料2 山口崇之『真木和泉』要約(吉川弘文館、一九六三年)

真木和泉（一八一三～六四）は、久留米水天宮の神職の家に生まれ、国学を学ぶも、水戸学に傾倒、水戸で会沢正志齋と面会。藩政改革派の肅清で十年蟄居するも、脱藩して島津久光上洛を画策、寺田屋事件に。その後長州と接近、禁門の変で敗れて天王山で自決。父左門に『絵本楠公記』を紹介された影響で、楠を敬慕すること一方ならず、毎年楠公祭を挙行。志士仲間からは、今楠公と呼ばれた。

辞世　　大山の峯の岩根に埋めけりわが年月の大和魂

### 資料3 「何傷録」（文久元年九月）（『真木和泉守遺文』有馬家修史所、一九一三年）

吾とても天照皇の御裔にて、衣冠礼儀に久しう浴し侍りしものの、夷賊腥羶の賤きに役使せらるべくもあらねば、一門子弟、一人も残らず討死し、久しき皇恩に報い奉らんとこそ、おもひ侍れ。されば楠公の闔族、三世数十人、天朝の為に死に給ひし事こそ、ならひ侍るべけれ。保臣がごときかざらぬものにて、一門挙つて死に侍らば、天下にはさりとも雄々しき死様かなとて、見習ふ人もあらんに、夷どももいかがせん。義勇烈しき国なりとて、むげにしげなうはし侍らじ。

### 資料4 拙稿「軍神を生み出す回路」（井上編『近世日本の歴史叙述と対外認識』勉誠出版、二〇一六）

幕末、維新の志士たちの公的な慰霊祭が定期的に行われたのは最大の死者を出した長州藩であったが、他藩において行われた招魂祭も含め、多くは幕末に盛んになった楠公崇拜と直結しており、楠公の弔祭に合わせてまま行われた。

さかのぼれば、天保五年（一八三四）に書かれ、嘉永五年（一八五二）に刊行された会沢正志齋の『草偃和言』は、新たに祭日を設け、広く庶民までが祀るべきとして、五月二十五日の楠の忌日を挙げていた。会沢は、徳川光圀が建立し、朱舜水が銘文を撰した湊川の「嗚呼忠臣楠子之墓」を紹介しつつ、この祭日について次のように述べている。

千古忠臣の第一等にして、人倫の模範となり、天下後世までも、義士の気を励ますべき故也。されば貴賤となく、此日に遇ては、殊に同志の友を求て、相共に義を励し、其身の時所位に随て、国家に忠を尽さむ事を談論思慮して、風教の万一を助け奉るべき也。

こうした会沢の説く顕彰の意義の背景をなす精神が、先の東湖の「正気歌」と同根であったことは言うまでもない。安政の大獄以降、国事殉難者が増えるに従い、その慰霊祭がこの楠忌日に営まれるようになる。会沢の影響を学問上強く受けた久留米の神官真木和泉は、吉田松陰亡きあとの、長州攘夷派の精神的支柱であったが、彼は「何傷録」で、数々の戦死者の先に国体を守り続けるという、矯激な思想を展開している。即ち、足利兄弟の逆心により、万世一系の偉業が失墜する危機に瀕した今、自身が先ず死に、続いて子孫・一門が残る者なきほどまで戦い続ければ、さしもの足利も、皇統の不変を悟るであろう。そこで日本本来の道が辛うじて護られる。それが楠の志であった、というのである。

真木はやはり楠崇拜でならした寺田屋事件の殉難者有馬新七ら八名の霊を慰めるべく、



文久二年（一八六二）の楠公祭の日に大坂で招魂祭を行っている。翌三年は中山忠光・久坂玄瑞と、さらに翌元治元年には、周防で三条実美ら長州落ちの五卿とそれぞれ楠を祀り、禁門の変を計画していたこの年の楠公忌日には、長州藩主毛利敬親が祭主となって、山口明倫館で初の楠公祭が挙行、吉田松陰ら殉難者十四名の慰霊も併せて行われている。真木は禁門の変に敗れて天王山で自刃するが、その後長州藩では楠公祭の日に国事殉難者の慰霊を行うことが定着してゆく。

長州だけではない、隣藩津和野は、藩主亀井茲監が国学に熱心だったこともあり、平田派国学が流行、大国隆正や福羽美静といった新政府の王政復古のイデオログとなる人物を輩出するが、慶応三年（一八六七）楠公祭が藩主の手で挙行されている。佐賀でも楠公祭は、義祭同盟として盛んであり、副島種臣・大木喬任・江藤新平らも参加している。

なかでも、大きな影響力を持ったのは尾張である。藩主徳川慶勝は水戸家出身で、藩内にあって楠公祭を営むにとどまらず、湊川神社の創建を再三朝廷に建白、主導的役割を果たす。

以上のような幕末の動きを受けて、慶応四年（明治元年、一八六八）、京都東山に国事殉難者を招魂社に祀るに当たり、豊臣秀吉・楠正成に次いでこれを祀るものとし（五月十日太政官布告）、墓所に接して招魂社を建てるその方法は楠祭のそれに沿ったものであった。王政復古を唱えて新政府樹立のために命を失った殉難者は、こうした招魂の慰霊祭により、ヒトガミとなってゆくのだが、天皇と彼らを結ぶシンボルとして楠正成が「触媒」の役割を果たした事情とは以上のようなものであったのだ。

#### 或は桜井の駅に伴ひ 遺訓何ぞ殷勤なる

或は天目山に狗ひ 幽囚君を忘れず

或は伏見城を守り 一身万軍に當る

承平二百歳 斯の気常に伸を獲る

然ども其の鬱屈するに当りては 四十七人を生ず

乃ち知る人亡すと雖も 英霊未だ嘗て涙びず

長く天地の間に在りて 凜然彝倫を紱づ

孰か能く之を扶持す 卓立す東海の浜

忠誠皇室を尊び 孝敬天神に事ふ。

「文天祥の正気歌に和す」（『東湖遺稿』巻五）

赤水佳談を伝へ 桜は義士の血を留む（中略）

墓には悲しむ楠公の志 城には仰ぐ豊公の烈（中略）

嗟此の数君子 大道を分裂に補ふ（中略）

最たり是平安城 仰ぎ見る天子の尊

神州万国に臨む 乃ち是れ大道の根

墨夷の事起りてより 諸公実に力めず

既に妖教の禁を破り 港を議す洲の南北

「文天祥の正気歌の韻に和す」(吉田松陰「縛吾集」)

資料5 飯倉洋一「濫觴期絵本読本における公家・地下官人の序文」(「江戸文学」四〇、二〇〇九年五月)

『絵本太閤記』に続く『絵本楠公記』(初編=寛政一一年・一七九九~三篇=文化六年・一八〇九)・『絵本忠臣蔵』(寛政一二年・一八〇〇、後編=文化五年・一八〇八)の序者は、公家および地下官人であり、序文は和文、宣長に近い妙法院関係者である。

【秀吉の神格化に関する参考文献】→

芦原義行「豊国大明神の盛衰」(『龍谷日本史研究』三六、二〇一三年)

芦原義行「豊国社の祭礼について—豊国社の神事並びに遷宮を中心に—」(『日本宗教文化史研究』一七一、二〇一三年)

河内将芳「京都東山大仏千僧会について—中近世移行期における権力と宗教—」(『日本史研究』四二五、一九九八年。のち、同著『中世京都の都市と宗教』所収、思文閣出版、二〇〇六年)

河内将芳「豊国社の成立過程について—秀吉神格化をめぐって—」(『ヒストリア』一六四、一九九九年。のち、同著『中世京都の都市と宗教』所収、思文閣出版、二〇〇六年)

北川央「神に祀られた秀吉と家康—豊国社・東照宮—」(佐久間貴士編『よみがえる中世2 本願寺から天下へ 大坂』所収、平凡社、一九八九年)

北川央「江戸時代の豊国分祀」(『ヒストリア』一四二、一九九四年)

北川央「豊臣秀吉像と豊国社」(黒田日出男編『肖像画を読む』所収、角川書店、一九九八年)

北川央「怨霊と化した豊臣秀吉・秀頼」(『怪』四一、二〇一四年)

近藤喜博「起請文罰神としての豊国大明神」(『史迹と美術』九一五、一九三八年)

斎藤夏来「秀吉の画像賛」(『禅学研究』八六、二〇〇八年)

西山克「豊臣『始祖』神話の風景」(『思想』八二九、一九九三年)

野村玄「豊国大明神号創出過程に関する一考察」(『史学雑誌』一二一—一一、二〇一二年。のち「慶長期初頭の政治情勢と豊国大明神」と改題されて、同著『天下人の神格化と天皇』所収、思文閣出版、二〇一五年)

資料6 井上泰至・堀新編『秀吉の虚像と実像』第10・14章文学編(笠間書院、二〇一六年) 同「帝国史観と皇国史観の秀吉像—『絵本太閤記』の位置」(前田雅之ほか編『幕末・明治』二〇一六年)

秀吉への評価が、源平将軍交代の狭間という位置づけ(林羅山・鶯峯『豊臣秀吉譜』)から、幕末の皇国史観・帝国史観からの英雄視への分水嶺に当たるのが、『絵本太閤記』である。特に、朝鮮の役を語る七編の冒頭で、貝原益軒の秀吉貪兵論(和刻本『懲毖録』序)を批判し(武内確斎序)、秀吉の神像掲出する点(→)、飯倉も指摘するように五編序(諸太夫

松井永喜)で、秀吉の神が神功皇后以来の武威の復古を遂げたと評価する点に確認できる。

資料7 『絵本太閤記』第五編序(序者松井永喜は諸大夫。妙法院門跡真仁法親王への本居宣長『古事記伝』の献上は、父永昌を通して行われた)

いはまくもあやにかしこきは、豊臣の神のみいつになも有ける。そのかみ葦原のいやみだりに乱りにたるを、焼鎌の利鎌もて、かり払うて、平均(ことむけ)ませるはては、から国までひたなびけになびけ玉ひし、やまとたましひの生(あし)のまにま、ちはやびたるみ功を、即皇国風の仮字にかきうつして、修飾(かざらひ)なくものしたるこそふさはしともふさはしけれ、ことさへぐ漢学(からまなび)の徒、あかぬわざになあはめそしりそ、玉纏(たままき)のま楫かけなべたる船も、岩たたむ高ねに漕のぼざむには、絶てえあらぬわざになむ、海はやうみ、山はや山の幸こそあらべ

すめらぎのおほ宮ところ古へにかへしそめたる神ぞそのかみ

資料8 宣長『馭戎慨言』(安永七年(一七七八)成、寛政八年(一七九六)刊)下巻

そもそもこの豊国神の。てうせんの国をうち給ひしは。後陽成天皇の御世にして。文禄元年より事始まりき。(中略)さるをはじめより。いささかもいさめる心のたゆまざりしは。加藤主計頭清正ぬしにて。ひたぶるに明の国まで。うちたひらげずはかへらじと。かたく思ひさだめて。かのまぎらはしかりけるむつびのすぢをも。さらにさらにうべなはず。太閤の御ためにも。大かた皇国のためにも。いといとまめなりしは。此ぬしになん有ける。(中略)かくのみたけくすぐれたる皇大御国のひかりをかがやかしおき給ひて。こまもろこしの後の代まで。いみしかりける事に。かたりつたへかきつたへたるは。さはいへど。此豊国神の御いさをになん有ける。かくて東照神御祖命の。天の下申給ふ御代になりてよりこなた。あぢきなきもろこしのむつびをば。きよくたちはて給ひて。いよいよますます皇朝をあがまへ尊み奉り給ひて。いとも有がたき御めぐみに

(宣長の草稿にこの家康の記事なし。『本居宣長全集』第八巻(筑摩書房、一九七二年)解題(大久保正))。

資料9 宣長『玉鉾百首』「あまり歌」(天明七年一七八七刊) →

- 1 かしこきやすめらみくさにいむかひてなやめ奉りしたぶれあしかが
- 2 いかなるや神のあらびぞ真木の立つあら山中にすみか御世経し
- 3 からくににこびてつかへてあしかがのしこのしこ臣御国けがしつ
- 4 天のしたとこ夜ゆくなす足利のすゑのみだれのみだれ世ゆゆし
- 5 いつまでか光かくらん久かたの天のいは戸はただしばしこそ
- 6 しづはたを織田のみことはみかどべをはらひしづめていそしき大臣
- 7 まつろはぬ国らことごとまつろへて朝廷(みかど)きよめし豊国の神
- 8 とよ国の神の御いつはもろこしのからのこくしもおじまどふまで

※『馭戎慨言』にも委くしるされたり(本居大平『玉鉾百首解』安永五年刊)

## 資料 10 一戸渉「万葉書和歌をめぐる覚書」

(「北陸古典研究」三〇、二〇一六年)

万葉書の長い歴史の中で、転換点となった著作があります。天明七年（一七八七）に刊行された本居宣長『玉銚百首』です。この本が画期的なのは、中身と書の関係です。そもそも「玉銚」というのは道の枕詞ですが、その本は古道論的ナショナリズムの代表的な著作です。（中略）注目したいのは、この『玉銚百首』という版本は、そういった古道論を載せる器として、万葉書が相応しいのだという認識を結果として作ったということです。（中略）宣長の『玉銚百首』以前に版本の形でこれだけまとめて、古道論と万葉書とを結合させた事例は皆無です。この本は、その後、本居家の養子に入った大平が注釈書を刊行し、弟子に講義をしたりして非常に広く読まれました。

先ほど、古学派登場以前の万葉書というものがどういった場面で、どういった意図で書かれるのかということ整理しましたが、では『玉銚百首』のこの万葉書は、先ほどの①から⑤のどれに該当するのでしょうか。①書の美しさ、でしょうか。②祝賀、儀礼性、③神秘、呪術性、④漢字との近さ、⑤知的遊戯、と、どれも『玉銚百首』の万葉書の性質を言い当てているとは考えにくいのではないのでしょうか。とりわけこれまで多くの比重が置かれてきた①の要素は、宣長のものには皆無とっていいと思います。

『玉銚百首』では、あくまで古道、神の道、古の道の主張を乗せるにふさわしい、古代風の意匠としてのみ万葉書が利用されていると理解できます。結果としてその後、かつて万葉書が持っていたような多種多様なあり方というのは失われていき、『玉銚百首』的な万葉書が多くなっていくという現象が見られます。それが顕著になるのが幕末です。

(→一戸渉「和歌の万葉書」「斯道文庫論集」五十、二〇一六年二月)

## 2 嘉永期の絵本読本の「啓蒙」

### 資料 11 濱田啓介「幕末読本の一傾向」（「近世文藝」六、一九六一年五月）

海外情報と国粹思想＝啓蒙

○は国文学研究資料館データベースで二〇本以上あるもの

- 文化元年（一八〇四） ○『繡像国姓爺忠義伝』初編  
(岡田玉山作画・篠崎小竹序) 大坂・柏原屋清右衛門
- 文政四年（一八二〇） ○『楠正行戦功図絵』前編  
(山田案山子作・西村中和画・西浦武孝序) 大坂・河内屋源七郎
- 文政七年（一八二三） 『楠正行戦功図絵』後編  
(山田案山子作・西村中和画) 大坂・河内屋源七郎
- 天保五年（一八三四） 『繡像国姓爺忠義伝』後編  
(好華堂野亭作自序・岡田玉山画) 大坂柏原屋源兵衛
- 天保六年（一八三五） 『絵本豊臣琉球軍記』

- (東西庵主人作・岡田玉山・松川半山画・序和文) 大坂天満屋安兵衛  
 天保十二年(一八四一) 『神功皇后三韓退治図絵』  
 (瀬川恒成作・葛飾戴斗画・西樺生生序) 大坂河内屋茂兵衛  
 嘉永二年(一八四九) ○読本『海外新話』(嶺田楓江作自序・橋本玉欄画か)  
 嶺田氏蔵版・江戸菊屋幸三郎刊か、重版あり  
 (奥田尚『海外新話』の南京条約「追手門学院大学文学部紀要」四二、二〇〇七年三月)  
 嘉永二年(一八四九) 『扶桑皇統記図絵』前編  
 (山田案山子作・柳斎重春画・松亭金水序・仮名) 大坂岡田屋嘉兵衛  
 嘉永三年(一八五〇) 『扶桑皇統記図絵』後編  
 (山田案山子作・柳斎重春画・松亭金水序・仮名) 大坂岡田屋嘉兵衛  
 嘉永六年(一八五三) 『絵本朝鮮征伐記』前編→  
 (菊池春日楼作・鶴峯戊申校序・橋本玉欄画) 江戸菊屋幸三郎  
 安政元年(一八五四) 『絵本朝鮮征伐記』後編  
 (菊池春日楼作・鶴峯戊申校・橋本玉欄画) 江戸菊屋幸三郎  
 安政六年(一八五九) 『本朝錦繡談図絵』(池田東籬作) 京山城屋佐兵衛  
 万延元年(一八六〇) ○『大日本開闢由来記』  
 (平賀元良作凡例・歌川国芳画) 江戸和泉屋金右衛門

資料 12 天野聡一「神代を描いた読本—『大日本開闢由来記』と宣長・隆正—」(「アナホリッシュ国文学」三、二〇一三・六月)

1 著者の平賀元良は、両国の開業医ながら、宣長についてはその著書から、大国隆正からは直接のその講義を通して影響を受けていた。

2 自序には、天皇が天照大神の子孫であることで、諸外国より日本が優位にあることを主張し、神剣・神鏡が国家を鎮護したその靈験のあらたかなることを、蒙古襲来の撃退まで語って明かすとし、記紀の他諸書を参照し、修飾を加えない本書は、「その体裁(すがた)の稗史小説(つくりものがたり)に類似たるを以て、同観(ひとしなみにみる)ことなかれ」と言う。

3 本書の構成は

- 卷一 スサノオの八岐大蛇退治からオオクニヌシの国作りまで
- 卷二 オオクニヌシの国譲りからウガヤフキアヘズまで
- 卷三 神武天皇の東征
- 卷四 神武天皇の橿原宮造営からヤマトタケルの熊襲征伐まで
- 卷五 ヤマトタケルの東征から神功皇后の三韓征伐まで
- 卷六 蘇我馬子の弑逆と仏教の流布から元寇までで神剣の神聖性と対外関係の神学

的解釈が骨格。

### 資料 13 幕末の橋本玉蘭（歌川貞秀）の活動

→三好唯義「江戸時代の地図出版」（「地理」四七、二〇〇二年六月）

「江戸時代における地図出版の状況を概略すると、その始まりは十七世紀初期にさかのぼり、その世紀末の元禄期を境にその量が増大する。さらに十八世紀後半の安永期を経て、多種多様大量の地図類が刊行流布する。（中略）十八世紀後半の安永期以降は日本図や世界図、各町図・国図、道中案内図、名所図会の類が、主として江戸の版元から大量に出回り、地図類の普及と活用はおそらく現代と同じような感覚だったと想像される。」

- 嘉永二年 ●海外新話 嶺田楓江作 橋本玉蘭画か→  
この頃、最初の富士登山（「三国第一山之図」）
- 嘉永三年 ●大内合戦之図・前太平記筑紫合戦図、発禁処分。→
- 嘉永六年 ●絵本朝鮮征伐記 菊池春日楼作 鶴峯彦一郎校正（～七年）→  
御江戸図説集覧 山崎北峰説 赤穂義士一夕話 山崎美成作（～七年）  
六月ペリー来航
- 嘉永七年 義経蝦夷勲功記 永楽舎一水作 蝦夷闔境輿地全図→
- 安政二年 利根川図志 赤松宗旦著 橋本玉蘭ほか画  
北蝦夷図説 間宮林蔵述・秦貞廉編 卷一・四 橋本玉蘭画  
大日本分境図成 卷一 赤穂義士随筆 山崎美成作
- 安政三年 ●武蔵国全図 菊池武辰編 橋本玉蘭画 菊屋幸三郎版→ 「征伐記」序  
万国地球分図 橋本玉蘭ら作画→
- 安政四年 大日本富士山絶頂之図 蝦夷葉那志 松浦武四郎編  
●摂州一之谷写真 附源平古戦之図→ 「征伐記」絵図、「国姓爺忠義伝」
- 安政五年 ○大成和漢年代記 鶴峯彦一郎作 菊屋幸三郎版
- 安政六年 御開港横浜大絵図・御開港横浜之全図 屑龍散人文 六月横浜開港
- 安政七年 唐太日記 鈴木重尚作 松浦武四郎評注
- 文久元年 ○下野国全図 鶴峯彦一郎作 菊屋幸三郎版 東蝦夷夜話 大内余庵作  
●横浜交易西洋人荷物運送之図→ 「征伐記」海戦図
- 文久二年 横浜開港見聞誌 肥前崎陽玉浦風景之図  
文久三年 ●右大将頼朝公参内之図→ 「征伐記」清正入城図  
英名百雄伝 近沢幸山作（～慶応四年）
- 文久四年 海陸道中画譜 京都一覽図絵 大日本海陸名所図会
- 元治二年 絵本孫子童観抄 中村経年編  
西国内海名所一覽 大阪名所一覽 東海道名所一覽之図
- 慶応二年 パリ万博出品浮世絵画帖制作の絵師総代となり、江戸名所風景十図を画く。
- 慶応四年 ○甲斐国全図 鶴峯彦一郎作 菊屋幸三郎版

新刻函館全図 新刻松前全図 錦絵・奥州一覽之図、大日本国郡名所  
刊年不明 ○常陸国常州十一郡全図 鶴峯彦一郎作 菊屋幸三郎版  
→匠秀夫『日本の近代美術と幕末』（沖積舎、一九九四）「二 横浜錦絵と五雲亭貞秀」、  
高橋伴幸「橋本玉蘭齋が描いた都市鳥瞰図の空間構成」（『茨城地理』六、二〇〇五）  
神戸市立博物館『特別展ワイドビューの幕末絵師貞秀』（二〇一〇）

**資料 14 依田学海「俗画師歌川貞秀の言を記す」（『洋々社談』七二、明治十四年二月、ゆまに書房版復刻第 2 巻所収）**

一日何某を伴い、貞秀が本所の草庵を訪いしに、其の家は亀戸天神社の前にありて膝を容るるばかりの狭き住居なり。流石に庭の草木なども、程よく裁なして、主人は窓の下に画をかきて居たりしが、余等が来りしを見て、筆をとどめて物語す。其頃は西洋画というものは、世に多からざりしが、貞秀は、いかにして蓄けん。帖に作りたる洋画を多く出して、余等に示し、且いへらく、和漢の書を多く見たれども、洋画ほど世に妙なるはあらず、文雅学士の画は、委しく知り侍らねど、和漢の俗画、多くは一種の偽体ありて、すべて画を見る人の為にのみ、前面を画き、其の人物山川の向背に心を附すものなし。殊に我国の俗画は、皆戯場俳優の所為のみ旨とし画くをもて、婦女の形容に至りても、多く戯場の身振ということを書して、尋常居動には、あるべきようもなき形のみ多し、戦闘の状に至りては、其弊甚しく、英雄、豪傑、奮勇苦戦の形状をして、俳優戯子の所為と異なることなからしむ。実に笑うべく、嘆ずべきの至りなり。

**資料 15 『市中取締集』（大日本近世史料）「書物錦絵之部 第一二九件」**

海外新話作者は、牧野河内守家来嶺田半次郎次男右五郎にて、蔵板摺立候上、同人頼を受馬喰町貳丁目庄兵衛地借書物屋幸三郎儀製本に相仕立、五拾部摺立右五郎江相渡・・・

**資料 16 『絵本朝鮮征伐記』序**

東方より皇帝が出、人倫・文化を伝えたというのは日本神話のことを指すので、日本は世界の中の君主の国である。（←平田篤胤『赤県大古伝』参考：遠藤潤『平田国学と近世社会』ペリかん社、二〇〇八）

この理にのっとって、国威を発揚したのが秀吉の外征である。また、この外征の先例は神の教えを奉じた神功皇后の三韓征伐であり、これが朝貢の始めであるのに、朝鮮正史の『三国史記』や『東国通鑑』に載せられないのは不審である。

太閤の外征の意味を真に理解していたのは清正であり、これを阻んだ小西行長は「**国体を汚す**」もので、清正にこの外征を任せたならば、朝鮮はおろか明もその手に落ちたであろう（←『馭戎慨言』「（小西行長が明側に送った文書に「日本から中国への朝貢が絶えた」と述べる部分を問題にして）そのうへかかる詞は、後の世まで**御国のひかり（国体）をおと（損）す**ことなれば、たとひかりそめのはかりことにもあれ、必いふまじきわざなり」）

→目録

資料 17 米谷均「破り捨てられた冊封文書」(井上・堀新編『秀吉の虚像と実像』笠間書院、二〇一六年五月刊行予定)

日本史上、中国皇帝から王号を授与された人物(中世以降)

＝懐良親王・足利義満・足利義持・足利義教・豊臣秀吉

うち、正式の冊封の手順を通して王号を授与され、受諾した例＝義満・秀吉

資料 18 一九五六年(九月十八日付、都発信)十二月二十八日付、長崎発信、フロイス年報補遺(松田毅一監訳『十六・十七世紀イエズス会日本報告集』第一期第二巻)

九月一日の引見の晩、秀吉は沈惟敬の宿所を訪れ、「シナ国王が予に対して非常に立派な礼を尽くしてくれた」ので、秀吉の出す返書においては、明皇帝の助言と判断に従う旨を記さねばなるまい、と述べた。

九月五日、堺に戻った冊封使は、秀吉の使僧の歓待を受けた後、「日本軍は朝鮮国内の陣営を撤去し全面撤退すべき」との書状を使僧に託した。これを大坂で読んだ秀吉は、明側の真意を理解し、頭上に湯気が立つほど激怒した。

資料 19 秀吉の冊封文書破却の言説

① 林羅山・鷲峯編『豊臣秀吉譜』(明暦四、一六五八年刊行)

「明主、我を封じて日本国王と為すと。固より是れ憎むべきの殊に甚だしき者なり。我は武略を以て既に日本に主たり。何ぞ彼の力を籍るか。前日行長曰く、大明は我を大明国王に為すと。故に我これを信ず。・・・即ち大明餽(おく)る所の冠服を解いてこれを著(き)ず。誥命を唐捐して復た見ず。(原漢文)

② 堀杏庵『朝鮮征伐記』巻五「於伏見城饗応大明両使事」(万治二、一六五九年刊)

「太閤大きに怒つて宣はく、大明より我を日本国王に封ずべしといふは、言語同断の曲事なり。我自ら日本国王たり。彼何ぞ我を許さんや。大明王に封ずべしと小西申せしに依りて、人数を引き取りぬ。小西を呼び出せ首を刎ぬべしと罵り給ふ」(この後兌長老の説得)

③ 宇佐美定祐『朝鮮征伐記』(寛文二、一六六二年)巻十「大明封号の儀相違に依り秀吉公再び朝鮮征伐を催す」

「即ち大明の贈物の冕服を脱ぎ、冠を脱ぎて庭上に抛ち踊上り踊上り怒り給ふ。諸大臣以下色を失ひ、手に汗を握り、唾を呑み・・・」(兌長老の説得)

④ 山鹿素行『武家事紀』巻十一(延宝元、一六七三年序)

「(①もしくは②の秀吉の逆鱗の記事の後)乃ち明よりをくる衣冠を捨、その冊書をなげうつ」(兌長老の説得)



⑤ 姓貴『朝鮮軍記大全』（宝永二、一七〇五年刊）卷二十七「太閤怒大明冊使」  
「乃ち大明より贈るところの冠服を尽く解きすて、大明よりの書翰をも引散し棄て復びとり上て見だにせず」（兌長老の説得なし）

⑥ 馬場信意『朝鮮太平記』（宝永二年刊）卷十七「明帝勅書并秀吉公立腹事」  
「大明より贈る所の冕服を脱、勅書と共に取て庭に抛捨玉ひ、怒り甚し」（兌長老の説得）

⑦ 本居宣長『馭戎慨言』（寛政八、一七九六年刊）下之下  
「其の詞かねておほしけるにはいたくたがひて、すべていみしくおごり高ぶり、いはんかあなくみやなきうへに、封爾為日本国王といへる言あるをきこしめして、俄かに御かほの色かはり、いみじくいかり給て、かの王われを明の王になすよし、申せしによりてこそ、朝鮮の王子どもをもゆるし、軍をも釜山よりしりぞかせつれ、日本国王にとは、いかなるたはふれ言ぞ、吾何のよしにかは、かれがよさし（冊）をうけん、おれ行長、明王に心をかよはし、から人共とかたらひて、われをあさむける罪、いはんかたなしとて、いみしき御けしきにて、たてまつれる冠さうぞくも此の書も何も、ひろ庭になげすて給ひしは、まことにさも有りぬべき物なりけり」（兌長老が小西に詔書の内容を変更して読むよう説得されながら、それを実行しなかった事のみ記す）

⑧ 武内確斎『絵本太閤記』七編（享和二、一八〇二年刊）卷五「太閤怒大明璽書話」  
去る程に靈三和尚、爰ぞ我が学才をかかやかさんと、璽書を取上げ封を披き、大音に読み上げける。（中略）早く行長を引き出し、明の両使と俱に首を刎ねよ、我みづから軍勢を引て明朝鮮を一踏に踏みつぶさんと、踊り上て怒り給ふ。（摩惠多年家の、異国の使者の前で、家臣を斬ることの非の忠告と、行長らの身柄を預かることで、その場は一旦収まる）

⑨ 頼山陽『日本外史』（文政十、一八二七年成）「徳川氏前記豊臣氏下」  
「爾を封じて日本国王に為すと曰ふに至り、秀吉色を変じて、立ちどころに、服を脱して之を地に抛ち、冊書を取りて之と裂し、罵つて曰く、吾日本を掌握す、王たらんと欲すれば王たらん。何ぞ髯虜の封を待たんや。且つ吾にして王とならば、天朝を如何せん・・・承兌も亦これを救解し、事纔に止むを得たり。（原漢文）→「豊公遺宝図略」

⑩ 『絵本朝鮮征伐記』後編卷十五「太閤大明の冊使を怒り給ふ事」  
「秀吉公是を聞き給ひ、行長が案にたがはず目を怒らし、大音に呼はつて、明王何ぞ吾を封じて日本国王とする事を受べけんや、誠にもつて推参なる云ひごとや、我自らの武略を以て日本の王となる、何ぞ彼等が力によらん、（行長が前日、明が秀吉を明王にすると云った嘘を怒り、行長を手打ちにすると述べた後）即ち大明より送れるところの冠服をことごとく解きて、大明よりの書翰をも引きさきて捨てさせ給ひ、其怒気甚だ盛んなり。」（兌長老の諫言

なし)

### 3 今後の課題—秀吉の英雄化の基盤と漢文修練

#### 資料 19 天狗党「挙義の檄文」（『水戸藩史料』下編卷十三、吉川弘文館、一九一五）

尊王攘夷は神州之大典たる事、今更申迄も無之候得共、赫々たる神州開闢以来、皇統目綿々御一姓天日嗣を受嗣せられ、四海に君臨ましまし、威稜之盛なる実に万国に卓絶し、後世に至ても北条相州之蒙古を塵にし、豊太閤之朝鮮を征する類、是皆神州固有之義勇を振ひ、天祖以来明訓を奉ぜし者にして、実に感ずるに余りあり。

#### 資料 20 大槻磐溪『近古史談』（元治元年十一月刊）卷二豊編第二「征韓之役」

征韓の役に、小早川隆景は開城府に在り。其の臣曾根兵庫をして起居を名護屋の營に候はしむ。太閤召して之を見る。兵庫拝謝して地に伏して曰はく、「寡君隆景、賤臣某をして敢へて講はしむ。今願はくは生兵十万を韓に致すを得ん。則ち其れをして韓の諸城を守らしめ、隆景乃ち諸将士と、現兵十三万を率ゐて、進みて馬を鴨緑江に飲ひ、長軀して山海関を破り、直ちに攻めて北京に入り、以て一たび其の巢窟を覆へさん。是れ寡君の志なり。」と。

太閤聞きて之を壮とし、顧みて東照公及び前田利家に謂ひて曰はく、「卿等善く記せよ。孤縦ひ不幸にして即世すとも、関白秀次の在る有れば、必ず將に明国を滅ぼして而る後に止まんとす。此の時に当たり、吾が魂化して一大鉄盾と為り、風雲に乗じ天に上り、以て四百余州の髯奴を一圧の中に殲さんこと、亦た吾が度内に在るのみ。困りて憶ふ古死して雷と為る者有り、孤偶ま其の名を忘る。」と。施薬院秀成側らに在りて曰はく、「即ち菅相国なり。」と。太閤曰はく、「然り。此の小漢は、吾が鞏丸の一点垢にも中たらざるも、尚ほ能く死して其の志を逞しくす。而るに何か乃公に有らんや。」と。満座悚然として、其の雄胆に驚かざるは莫し。

寧静子曰はく、「太閤征韓の役、世議する者多し。余則ち謂へらく、蓋世の雄を以て、無事の朝に立てば、咄咄髀肉の生ずるに堪へず。則ち外征して兵を耀かすも、亦た勢ひの必ず至る所なり。特に主将其の人を得ず。加ふるに地理に暗きを以てし、而して公の齡も亦た従つて頽せり。仮し其の事をして五六年前に在りて、公自ら親征の勞に任せしめば、則ち転瞬に韓を滅ぼし、旦暮に江を渡り、明社の覆へるは、未だ必ずしも覺羅氏の先に在らずんばあらざるなり。

故に余嘗て宇内の英雄を歴論し、定めて四傑と為す。曰はく、『豊太閤』曰はく、『忽必烈』曰はく、『歴山王』曰はく、『那波烈翁』と。而して秦皇漢武は与らず。猗与、偉なるかな。」と。(原漢文)

→古賀侗庵編『良将達徳抄』十(文政十年序、天保二年書後)＝世界情勢の把握から天保期に朝鮮観が変化(眞壁仁『徳川後期の学問と政治 昌平坂学問所儒者と幕末外交変容』名古屋大学出版会、二〇〇七)

→三谷博『明治維新とナショナリズム 幕末外交と政治運動』(山川出版社、一九九七年)「第二章 十九世紀前半の国際環境と対外論」

→井上泰至「9 「復古」と「維新」はどう意味づけられていくか」(井上・金時徳『秀吉の対外戦争』笠間書院、二〇一一年)

#### 資料 20 栗原信充『続武将感状記』(天保十四年、一八四三刊) 自序

余少き時、(柴野)栗山先生、文を諸生に教ゆるの説を与り聞くことを得たり。云く、諸生、文を作ることを学ばんと欲せば、則ち姑く須らく淡庵の碎玉話(武将感状記)を撮り、以て辞を修することを要すべし。畢れば則ち復た、詞を換え字を填じ、以再以三、数十次に至て、爾る後其の属辞、自然に流暢平坦、以て伝ふべきなり、と。(原漢文)

→栗原編『真書太閤記』(安永年間成立、明治四二、一九〇九年帝国文庫巻頭)秀吉冊封に激怒の場面は、『絵本太閤記』に同じ。

#### 結論と今後の課題

大本藍表紙・漢字カタカナ交じり本文・挿絵なし・序文は漢文という、漢文の史書に準じる様式を持った刊行軍書が、十七・十八世紀を通じて、歴史読み物として娯楽を提供すると同時に、源氏將軍史観を一般にもたらしたが、十九世紀には、名所図会の歴史読み物化をなした絵本読本が、新たに歴史読み物のジャンルとして加わり、特にその「啓蒙」性には、海外情報への関心と国学の国粹思想が柱にあり、仮名で歴史を綴る様式(あるいは価値も?)の反転が、生じた可能性が見えてきた。

今回取り上げなかった同傾向の絵本読本の内実を、より深く掘り下げると同時に、同時期の漢文で書かれた、頼山陽や後期水戸学の史書、それに武将伝を漢文で作文して修身の用に立てる教育方法とそのテキストとの関係が、一般の歴史意識と歴史読み物の関係において、大きな課題であることが浮かんできた。

講義内容の詳細については、韓国檀国大学校日本研究所発行の「日本学研究」53号（2018年1月）掲載の、井上泰至「信長・秀吉の語り方」を参照のこと

[http://dkjapan.or.kr/jpn/html/sub5\\_06.html](http://dkjapan.or.kr/jpn/html/sub5_06.html)

### 朝鮮征伐記

- 1 朝鮮上質表事附閔白命諸卒
- 1 琉球国入貢之事
- 1 朝鮮国始末之事
- 1 朝鮮国征伐人数備之事
- 1 諸軍渡海取番船之事
- 1 日本勢着取釜山浦城事
- 1 日本勢入王城事附加藤正捕二王子事
- 1 軍勢又渡海事並小西檄書事

- 2 平壤軍討取史遊擊事附沈惟敬事46
- 2 李如松攻平壤小西引退事
- 2 小早川隆景開城軍事附南安軍事

### 朝鮮太平記

- 1 朝鮮国来由事
- 1 三韓属于日本事並改国号事
- 1 豊臣秀吉公素生事
- 1 秀吉公治世事
- 1 遺橘康広に朝鮮事
- 1 宗対馬守義智到于朝鮮事
- 2 通信使入洛事并秀吉公關東出馬事
- 2 攻落山中城事
- 2 伊達陸奥守政宗參陣箱根事并八王子落城事
- 2 北条門族滅亡事并奥州仕置事
- 2 通信使到聚楽亭事附国書事
- 2 秀吉公返簡事附調信玄蘇等再朝鮮事
- 2 琉球朝貢事
- 2 九部政実謀反事附秀次卿新発奥州平均事
- 3 官使帰国朝鮮事
- 3 琉球朝鮮馳使報大明事
- 3 朝鮮国妖怪事
- 3 金誠一與玄蘇調信等会事
- 3 朝鮮撰三道将事
- 3 李舜臣被拜水使事
- 3 大和大納言秀長逝去事并棄君早世事
- 3 秀吉公朝鮮征伐評定事
- 3 藤堂佐渡守高虎被登高野山事
- 4 申砦李鎰巡見辺備事
- 4 加藤小西承鴻寅先陣事附朝鮮国地理国事
- 4 朝鮮渡海人数被相定事并加藤氏来由事
- 4 太閤秀吉公御出陣事并名護屋御著陣事
- 4 船手諸国会合事
- 4 小西行長著岸釜山浦事
- 4 釜山東萊等落城事附行長埋象賢屍事
- 4 鵲院合戦附審陽金海等落城并麟禹伏龍事
- 4 加藤清正攻落慶州城事并秀家朝鮮渡海事
- 5 李鎰到尚州事
- 5 小西行長與李鎰鬪尚州事
- 5 朝鮮王城怪鳥事
- 5 小西行長陷忠州附申砦取次事
- 5 日本諸將於忠州会合附加藤小西口論事
- 6 加藤清正渡韓江附金命元奔臨津事
- 6 景応舜還王城附李德馨応舜趣忠州事
- 6 都城周章附王李昫出避事
- 6 李昫著御平壤事
- 6 小西行長入王城事
- 6 木村来蔵被免生篠指物并加藤清正入都城事
- 6 日本諸将会合八道手分事
- 6 浮田秀家楊州合戦附申格死罪事
- 6 小西加藤臨津合戦事
- 6 李鎰奔平壤同鬪万頃台下事
- 6 重軍勢渡海朝鮮事
- 6 遼東世祿来平壤事
- 7 加藤清正與韓克誠戰事
- 7 平壤城中騷動附柳成龍鎮乱民事
- 7 援兵祖承訓史儒算進發事

### 絵本太閤記

- 5, 11 秀吉公馬船渡小田原話
- 5, 11 山中城落破話
- 5, 11 伊達政宗參小田原話
- 5, 12 小田原落城之話
- 6, 1 朝鮮官使来朝話
- 6, 1 太閤遣書琉球話
- 6, 1 朝鮮征伐評議話
- 6, 1 朝鮮渡海定先陣話
- 6, 3 諸大将卒軍向筑紫話
- 6, 3 朝鮮渡海小西行長透諸將話
- 6, 3 小西行長陷釜山浦登萊話
- 6, 3 加藤清正立坂破伏兵話
- 6, 4 小西行長陷尚州話
- 6, 4 小西行長陷忠州話
- 6, 4 小西加藤論先陣話
- 6, 4 加藤清正涉龍津話
- 6, 4 小西行長入王城話
- 6, 5 小西行長為入大明話
- 6, 5 加藤清正海汀倉擒韓克誠話
- 6, 5 加藤清正深入北道話
- 6, 6 朝鮮王開平壤城話
- 6, 6 朝鮮人夜討日本勢話

### 絵本朝鮮征伐記

- 1 朝鮮国の図并地理の名目
- 1 朝鮮国初の事
- 1 衛滿朝鮮の王となる事
- 1 三韓古今分別有事
- 2 朝鮮地方大略の事
- 2 日本より三韓を初て攻る事
- 2 日本代々朝鮮を攻る事
- 2 新羅国興廢并朝鮮鷄林と号する事
- 2 高句麗始興の事
- 2 百済国始祖興の事
- 2 唐新羅滅亡并高麗始祖王建の事
- 2 高麗盛衰并李成桂位を竊む事
- 3 豊臣秀吉天下御成敗の事
- 3 橘康広朝鮮に到る事
- 3 重て兩使を朝鮮に遣さる事
- 3 朝鮮の三使来朝の事
- 3 棄君誕生并逝去の事
- 3 秀吉公朝鮮征伐思立の事
- 4 朝鮮征伐船造の事
- 4 秀吉公琉球国に遣す事
- 4 朝鮮大明に急を告る事
- 4 朝鮮国日本の軍を惧并英雄を選ぶこと
- 4 朝鮮国に到る人数著当の事
- 4 秀吉公筑紫御進發の事
- 4 渡海の諸将軍評定并逆風に逢事
- 4 小西行長拔懸附藤堂佐渡守唐嶋を焼事
- 5 加藤左馬助番船を乗取事
- 5 日本勢釜山浦の城を取事
- 5 小西行長東萊を攻陥す事
- 5 浮田秀家行長に後詰の事
- 5 慶尚道所々落城并黒田長政金海に入事
- 6 黒田長政金海稷山城を攻とる事
- 6 小西行長忠州を攻陥す事
- 6 朝鮮王都を落る事
- 6 加藤清正小西行長先陣を争ふ事
- 6 王城途中郡県を陥る事
- 6 加藤清正龍津を越る事
- 7 小西行長朝鮮の都城に入る事
- 7 加藤清正王都へ入る事
- 7 朝鮮王所々艱難の事
- 7 朝鮮王平壤に入る事
- 7 戸川花房白光彦李時禮を討事
- 7 黒田甲斐守長政武勇の事
- 7 清正王子を追かくる事
- 7 清正克誠が軍を戦ひやぶる事
- 8 清正兀良哈人と合戦の事
- 8 清正安辺へかへる路軍の事

2 晋州城攻の事

- 7 平壤城中出避商議并玄蘇調会李德馨事
- 7 小西行長攻落平壤事
- 7 柳成龍諸博川并車駕到定州事
- 7 成龍守倉議事
- 8 小西行長與承訓關安定館附史儒算戰死事
- 8 加藤清正擒両王子事
- 8 加藤清正於女直兩度合戦附攻落濟州事
- 8 李舜臣元均等船軍附加藤左馬助乘取番船事
- 9 太閤秀吉公上洛附御母堂薨去事
- 9 元翼李賞攻平壤并東明司馬石星遣沈惟敬於朝鮮
- 9 浮田秀家攻落朔寧附沈滯戰火事
- 9 筑紫上野介広門攻熊嶺事
- 9 小西行長與沈惟敬会谈事
- 9 小西行長遣書簡於沈惟敬事
- 9 石田治部少輔三成與辺応星關并元豪春川合戦事
- 9 權応鉄攻取永川并朴晋落慶州城事
- 10 神宗皇帝被定援兵并沈惟敬見宋応昌事
- 10 大明援兵進発附李將軍拘沈惟敬事
- 10 李鑑成巡辺使并金順良被誅事
- 10 太閤於名護屋越年事
- 10 柳成龍見提督并查大受謀倭軍事
- 10 李如松攻平壤牡丹台事
- 10 同平壤合戦事
- 10 小西行長引退于王城并金敬老事
- 11 小早川隆景王城被引取并李賚成巡辺使事
- 11 柳成龍造索橋事
- 11 碧時駅合戦事
- 11 成龍諫李如松附明兵退開城府事
- 11 倭軍攻安南府岩事
- 11 大友義統蒙御勘気事
- 12 梁養山合戦事
- 12 憑仲櫻到安辺事
- 12 加藤清正鍋島直茂以下帰陣王城事
- 12 李如松退平壤事
- 12 攻晋州城附毛利甲斐秀元渡海朝鮮事
- 12 查大受焼龍山倉并戸次統直事
- 12 王城諸將会合附加藤清正夜討事
- 13 沈惟敬再調和議事
- 13 柳成龍為逢危難事
- 13 日本諸勢引退王城事
- 13 李如松入王城并李如栢事
- 13 唐使来名護屋事
- 13 秀吉公誘引唐使船遊事
- 13 唐使帰国附小西如安重渡朝鮮事
- 14 両王子帰京附日本勢守所々城事
- 14 日本諸將進発晋州事
- 14 晋州城攻事
- 14 晋州落城附徐礼元金千鎰最期事
- 14 顧養謙代応昌成経略事
- 14 如松班師并孫鋌成経略同詰沈惟敬事
- 15 秀吉公軍議附浅野弾正少弼長政諫言事
- 15 肥後国一揆附浅野長政御勘気赦免事
- 15 秀頼公誕生附秀吉公御帰陣事
- 15 秀吉公被築伏見城并吉野花見高野參詣事
- 6, 6 平壤落城并唐島船軍話
- 6, 6 豊太閤名護屋陣之形勢話
- 6, 6 石田三成示謀島左近話
- 6, 7 小西行長破遼東之軍話
- 6, 5 加藤清正擒両王子話
- 6, 5 加藤清正討兀儿哈話
- 6, 6 李舜臣用亀甲船破日本勢話
- 6, 7 大廳薨御話
- 6, 7 沈惟敬説石星話
- 6, 7 沈惟敬欺日本手勢話
- 6, 9 小西行長書贈沈惟敬話
- 6, 7 日本加勢渡海朝鮮国話
- 6, 8 小西行長平壤戦明兵話
- 6, 8 小早川隆景大破明兵話
- 6, 8 加藤清正鍋志摩尚繁形勢話
- 6, 8 鍋志摩尚繁兀平山破朝鮮軍話
- 6, 9 加藤清正救金山橋中城話
- 6, 9 加藤清正打殺虎話
- 6, 9 加藤三保義勇愕衆将話
- 6, 9 安南合戦話
- 6, 9 日本勢焼王城話
- 6, 10 明使渡海日本両太子還朝鮮話
- 6, 10 太閤朝鮮之戦勝賞罰話
- 6, 10 晋州城合戦話
- 6, 10 晋州城攻事
- 6, 10 太閤名護屋陣中開瓜臍話
- 6, 10 後藤又兵衛菅六之助斬虎話
- 6, 11 名護屋本陣中評定話
- 6, 11 拾誕生話
- 6, 11 太閤伏見築城話
- 6, 11 太閤吉野花見話
- 7, 3 秀次謀反露見話

3 遊撃沈惟敬調和議事75

- 3 太閤被仰遣朝鮮国城々仕置の事
- 3 晋州城を攻落事
- 3 依和議兩國軍勢引退事

- 4 秀頼誕生太閤大坂に還給ふ事102
- 4 日本両使入朝筆談の事
- 4 太閤伏見の城を築給ふ事附秀次誅に伏す

- 8 秀吉公加勢を朝鮮につかはさるる事
- 8 小西行長朝鮮勢を破る事
- 8 李鑑行在所に到る事
- 8 李鑑義統が兵を防ぐ事
- 8 遼東の李時茲朝鮮を窺見る事
- 9 清正征東使伯寧將軍を擒にする事
- 9 東征使伯寧両王子にまみゆる事
- 9 黒田長政が先勢狼川にて軍の事
- 9 小早川隆景晋州城をかこむ事
- 9 行長書を朝鮮王へ贈る事
- 9 行長数度和議を欲する事
- 10 李徳馨僧玄蘇等に会する事
- 10 小西行長平壤城東岸に寄る事
- 10 朝鮮の軍兵浅灘に備ふ事
- 10 朝鮮王嘉山に留る事
- 10 高彦伯小西行長が陣へ夜討の事并倭兵江を渡る事
- 10 平壤落城の事
- 10 柳成龍兵糧を聚る事
- 10 遼東の祖承訓遊撃將軍史儒朝鮮を援事
- 10 小西行長祖承訓と戦ふ事
- 10 祖承訓遼東に走る事
- 10 元均李舜臣をまねく事
- 11 日本朝鮮の両船見乃梁逢ふ事
- 11 李舜臣亀甲船を造る事
- 11 左馬助船中働きの事
- 11 日本船引退く事
- 11 大廳薨去の事
- 11 沈惟敬遇石星事
- 11 小西が兵李元翼と戦ふ事
- 11 小西行長惟敬と定約の事
- 11 大明の兵朝鮮国に到る事
- 11 明将日本の兵を誘く事
- 11 平壤城合戦の事
- 12 小西行長平壤を退く事
- 12 朝鮮行長を追はんと議る事
- 12 黒田久留米の両将開城府の城を引取事
- 12 柳成龍反間をいけどる事
- 12 加藤鍋島或鏡江原に働く事
- 12 朝鮮人所々に義兵を起す事
- 12 加藤橋中城後詰の事
- 12 李如松李鑑をとがむる事
- 12 日本の諸将王城を自焼事
- 12 開城府合戦の事
- 12 李提督日本勢をはばかる事
- 12 安南合戦事
- 12 朝鮮の諸軍各所に遮る事
- 13 李如松平壤を退く事
- 13 朝鮮国飢饉の事
- 13 沈惟敬和睦を行長とはかる事
- 13 日本の諸将王城を退く事
- 13 大明勢王城に入かはる事
- 13 大明の兵将小西行長を追ふ事
- 13 両使日本へ来る事

4 大明両使璽書を齋来朝する事  
5 於伏見城饗応大明両使事附和議破事128

5 日本勢重て朝鮮に入事  
5 石司馬凶獄の事

6 大明評定の事154

6 沈惟敬とらるる事

6 南原をせめおとす事

7 全州開しりぞく事177  
7 平倭十議の事附全義館軍の事

7 大明大軍朝鮮に入事

15 小西如安詣明朝廷附問答事  
15 唐使発明京事  
15 関白秀次公廃去高野山事  
16 三使登高野山  
16 楊方享到釜山浦事  
16 李宗誠奔走并冊使発船釜山浦事  
16 石田治部少輔譚加藤清正并石田立身来由事  
16 大地震附加藤清正登城事  
16 三奉行清正遣使事  
16 清正出仕御勤気赦免事  
16 黒田甲斐守長政虎狩事  
17 洛東大仏殿同仏像破壊事  
17 冊使登城事  
17 秀吉公饗応冊使事  
17 明帝勅書附秀吉公御立腹事  
17 使臣等帰国事  
17 李元翼與方亨惟敬等会谈并惟敬詐欺朝廷事  
17 南蛮商船寄土佐国事  
17 加藤清正帰国事  
18 將軍重渡海于朝鮮事  
18 楽山落城并王李岬出避京城事  
18 小西行長計略附李舜臣出獄事  
18 倭軍築朝鮮所々城郭事  
18 司馬石星囚獄事  
18 明諸臣軍議事  
18 明帝再被出援兵事  
18 朝鮮三道事  
19 柳川調信兩度使日本事  
19 沈惟敬送加藤清正書簡并答書同送金命元書簡事  
19 邢総督欲擒惟敬附四獄事  
19 元均迷酒色并惟敬通小西於南原虚実事  
19 加徳島合戦事  
19 元均敗軍附裴稷焚閑山事  
20 加藤小西攻黄石山城附落城事  
20 李舜臣再成統制使事  
20 日本諸將発向南原并李福男事  
20 南原城攻事  
20 南原落城事  
21 陳愚衷奪里民糧事  
21 全州城開退事  
21 將軍麻貴催船并吳惟忠退回元翼発向忠惜事  
21 黄門隆景卿逝去附小早川家系事  
21 李舜臣舟軍并陳璘到古今島事  
21 楊鎬到王京并朝鮮專守禦事  
21 指揮茅明時献平和十議事  
22 稷山合戦事  
22 益喬遇節加勢附解生引退事  
22 母里但馬守友信武勇并菅六之助正利事  
22 權慄畏倭軍并星州谷城青山等城開退事  
22 邢玠到朝鮮都城附朝鮮諸將勦戰功事  
22 李元翼喚還降倭人民事  
23 軍門邢玠軍商議事  
23 邢玠遣所々舟手於加勢事  
23 明將馮牙犒三軍事

7, 4 徳善院孝蔵主説関白話  
7, 4 秀次公昇高野山話  
7, 4 秀次公以下生害話  
7, 4 畜生塚由来話

7, 5 明李宗誠走釜山浦話

7, 5 太閤怒大明璽書話  
7, 5 明使被追立伏水話

7, 5 蛮船漂着土佐国話

7, 6 日本軍兵渡海朝鮮話

7, 6 大明之援兵救朝鮮話

7, 6 沈惟敬下獄話

7, 6 小西行長破元均話

7, 7 清正黄石山城斬郭趣話

7, 6 日本軍自海陸向南原話  
7, 7 日本勢攻南原話  
7, 7 南原落城話

7, 7 全州落城話

7, 8 李舜臣大破日本勢話  
7, 10 藤堂脇坂等水戦陳璘話

13 朝鮮の王子軍兵重て渡海の事  
14 朝鮮の軍兵晋州を救はんと欲する事  
14 晋州城合戦の事  
14 清正鞏韞軍を作る事  
14 沈惟敬再び和睦をする事  
14 大明の諸將西へかへる事  
14 黒田浅野等異見の事  
14 朝鮮王還王城に并大明経略使を改る事  
14 秀頼誕生の事  
14 大明の両使朝鮮へいたる事  
15 吉野の花見の事  
15 大明使釜山浦に到る事  
15 豊臣秀次生害の事  
15 李宗誠逃亡する事  
15 大明使日本に渡海の事  
15 大明の両使日本に到る事  
15 大明使饗応の事  
15 大明の使者を追立てる事  
15 秀吉公再び朝鮮を伐んと欲する事  
15 大明使帰国の事  
16 朝鮮渡海の人数揃の事  
16 朝鮮再び騒動の事  
16 元均李舜臣を護する事  
16 黒田長政等日本勢渡海の事  
16 大明の援兵朝鮮に向ふ事  
16 沈惟敬使を清正が方へつかはす事  
16 邢玠惟敬を囚ふ事  
16 沈惟敬獄に下る事  
16 元均が船軍閑山に向ふ事  
17 小西行長元均が船軍を破る事  
17 元均逃れ走る事  
17 朝鮮所々城守り甲乙の事  
17 郭趁義のために死する事  
17 陽元援兵をあつむる事  
17 日本勢南原を攻る事  
17 南原落城の事  
17 喜明等南原の援兵を止る事  
17 李舜臣船軍の事  
17 李舜臣功を陳隣にゆづる事  
18 黒田勢解生等と闘ふ事  
18 朝鮮王再び王城を開く事

18 大明の兵星州谷城を乗とる事  
18 大明の総帥邢玠朝鮮に到る事  
18 浅野幸長蔚山に入る事  
18 明兵蔚山城に寄る事  
18 清正毛利が軍を救ふ事

8 蔚山をせむる事202	23 加藤清兵衛尉刀戦并彦陽合戦事	7, 8 加藤清兵衛勇智碎明兵之軍威事	18 清正蔚山城を救ふ事
	23 浅野幸長與高策吳惟忠合戦并浅野家来由事	7, 8 島山合戦話	18 麻貴鳶山城を攻る事
	24 蔚山城攻事	7, 8 明大將軍刑玠押寄蔚山話	18 清正蔚山城に入る事
	24 將軍麻貴遊撃擺賽攻蔚山事		18 蔚山城飢渴の事
	24 加藤清正被入蔚山城事	7, 9 加藤清正入蔚山城	19 加藤清正楊鎬を誘く事
	24 十二月二十六日蔚山城攻并城兵夜討事	7, 9 朝野左京太夫至言説清正	19 蔚山急を諸將に報ずる事
	24 明兵取困蔚山城附取切水手事		19 鍋島黒田李如梅を破る事
	24 明兵瓮仏郎機事		19 蔚山城兵楊鎬を追かけやぶる事
	24 蔚山城中飢渴并寄手詐引退事		19 楊鎬退けらるる事
	25 清正楊鎬会盟破事		
	25 日本諸將蔚山後詰附黒田入道如水築山城軍事		
	25 立花左近將監宗茂般丹合戦事		
	25 万曆二十六年正月元日合戦事		
	25 楊鎬奔走并後藤又兵衛尉基次物見事		
	25 蔚山後援諸將與明勢合戦附明兵大崩事	7, 9 明兵解困退王城話	
	25 加藤清正注進日本并感状事		
8 大明軍勢又評定の事	25 吉川改干旄并堤妙法陣表服同黒田殿被施面目事	7, 9 清正吉川広家与馬印話	
	26 秀吉公催醍醐花見事	7, 10 醍醐花見話	19 秀吉醍醐花見の事
	26 劉綎陳隣以下諸將入王城事	7, 10 劉綎張伏兵為捕行長話	19 加藤嘉明陳隣と船軍の事
	26 秀吉公醍醐花見事	7, 10 太閤怒行長賞	19 日本の諸將順天城軍評議の事
	26 楊鎬被罷經理帰大明事		19 東山耳塚の由来の事
	26 大明手勢手分附李如梅帰明事		19 劉綎行長を誘く事
	26 順天諸將軍商議附注進日本事		20 邢玠朝鮮に入て手配の事
8 日本の軍兵過半帰朝の事	27 朝鮮在陣諸將過半帰朝附藤堂高由素姓事		20 郭国安が隠書の事
8 蔚山順天いくさの事	27 劉綎詐議和睦附会盟破事		20 茅国器望津を乗取る事
	27 麻貴重攻蔚山附城兵夜討事		20 董一元島津を誘く事
	27 立花左近將監宗茂蔚山後詰事		20 義弘董一元と合戦の事
	27 蔚山寄手敗北事		20 義弘贈職を事
9 島津新塞いくさの事232	28 茅国器計略附望津落城事	7, 11 大明陸路大軍議攻蔚山新塞話	20 浅野石田朝鮮の軍兵をむかふ事
	28 董一元詐議和好并泗川落城事	7, 11 董一元茅国議破史志摩図勢話	20 日本勢軍をかへ評定の事
	28 董一元與諸將軍商議事	7, 11 泗川城合戦話	20 李舜臣戦死の事
	28 新塞城軍附明兵敗走事	7, 11 志摩図吉広鑿明軍話	20 李莞陳璘を救ふ事
	28 大明勢逃帰星州事		20 行長が兵士鼓金島に困めらるる事
9 太閤薨去遺言の事	29 秀吉公築耳塚附吉田六郎太夫長利事		20 帰陣の將伏見に到る事
	29 秀吉公御薨去事		
	29 朝鮮在陣諸勢可被引取僉議事		
	29 方日新没海中事		
9 日本人引取事	30 大明諸將軍計策事		
9 大明日本軍功を賞する事	30 日本勢開退諸城附船軍事		
	30 日本諸將帰朝事		
	30 鄧子龍李舜臣事		
	30 朝鮮静謐并明帝賞諸將事		
	30 於博多諸將会合事		
	30 諸將上著伏見附島津義弘賜恩賞事		

朝鮮記内所名256  
日本より高麗までの道  
薩摩より琉球への道